

<子ども>論からみたニヒリズム：構造としてのニヒリズムとその「克服」？

土戸, 敏彦

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：教授：現代教育思想論

<https://doi.org/10.15017/3662>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 6, pp.39–53, 2004-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究院教育学
部門

バージョン：

権利関係：



KYUSHU UNIVERSITY

〈子ども〉論からみたニヒリズム

—構造としてのニヒリズムとその「克服」？—

土 戸 敏 彦

はじめに

われわれの世界は〈意味〉に満ちている。〈意味〉が氾濫している。〈意味〉が過剰だといつてもよい。ただし、この〈意味〉は純粹記号学的なものというより、〈価値〉が貼りついたものとして、である。たとえば「人生の意味」などというときがそうであろう。あるいは、このような論文をものする〈意味〉、それを公にする〈意味〉、そもそも研究することの〈意味〉……。

たしかに、さまざまな〈意味〉に支えられて、われわれの日々がある。〈意味〉なくして、われわれの生はない。しかしながら、これらの〈意味〉は悠久の昔から存在したのではない。永劫の果てまで不变であるわけではない。

そのような眼で見ると、〈意味〉で満たされていない空間の広大さに目を見張ってしまう。〈意味〉の欠けた時間の果てしなさにただただ驚かされる。

そのとき、あの忌み嫌われる「ニヒリズム」が顔をのぞかせるのだ。ニヒリズムに陥らないようにならなければならないし、ニヒリズムを克服しなければならないと、ひとは言う。

しかし—、われわれは〈意味〉がないことを過度に恐れていないか。〈意味〉の欠如に異常なほど怯えていないか。

そのように自問しうるために今できることは、思考の迷路を少しずつたどり始めることだけかもしれない。

I ニヒリズムの扱われ方

ニヒリズムといっても、実はさほど単純ではない。つまり、さまざまなニヒリズムが存在する。たとえば、仮に「ニヒリズムとは何かについて否定しようとする態度である」と規定するならば、ニヒリズムが否定しようとしているこの「何か」によって当のニヒリズムを分類するという方法がある⁽¹⁾。その「何か」は、「世界の存在」であったり、「神や絶対者」、「歴史の目的や意味」あるいは「自分の存在」、さらには「他者の存在」でもありうる。それぞれによって、ニヒリズムの意味も異なってくることが考えられる。

このような分類は哲学的なニヒリズム分析のレベルで展開されるが、しかしそれ以前の段階とし

て、通俗的なレベルをも含めた分類をしておく必要があると考えられる。「教育哲学」的なニヒリズム考察へは、通俗性という迂路を通してはじめてたどり着けるように思われるからである。

世間ではかつて（1970年代）「三無主義」という言葉が流行したことがある。その内容は「無気力・無関心・無責任」だとするのが一般的である。その言葉には、こうした風潮ないしそのようないい傾向をもった人々（とくに若者世代）を批判する意図がこめられていたと思われる。その時代にかぎらず、個人においても、世相としても、「やる気をなくしてしまう」「何もやる気がおこらない」という気分が生じるのは稀ではない。ある種の空しさ、虚無感はいたるところに存在している。

えてして、このような気分を指して、俗に「ニヒリズムに陥る」と言われることがある。ものごとに積極的に取り組めない。何をやっても空しい。さらに、これが昂じて「すべては無意味だ」という感覚にとらわれることさえあるかもしれない。

こうした気分をそもそもニヒリズムといえるかどうか、はなはだ疑わしいが、しかし昨今の世相が問題にされるさい、必ずといっていいほど「デカダンス」や「刹那主義」なる言葉とともに「ニヒリズム」が人の口から語られる⁽²⁾。通俗的とはいえ、一定の流通性がある以上、これをさしあたり、通俗的な語法であることを踏まえたうえで、「気分としてのニヒリズム」と呼んでおくこととする。

さて、この「気分としてのニヒリズム」を、いま少し内容的に分析してみると何が言えるだろうか。むろん、この俗なる見解は、後に述べるニヒリズムという問題をほとんど理解していないことを示しているが、ただそうであるとはいえ、これが含む二義性からある種の示唆を得ることができる。

まず、何ものをも肯定できなくなつて、虚無的な気分にある者が、自分自身が「ニヒリズムに陥っている」と感じるケースである。気分的な自己了解としてのニヒリズムとも言えよう。つまり、当の主体が自分自身を省みてニヒリズムに陥っていると自認する場合である。いうならば「気分としての主観的ニヒリズム」ということになる。

いま一つは、ある人物が否定的ないし極度に懷疑的な状態にあるように他人に見えた場合、後者が前者を指してニヒリズムに陥っているとする場合である。たとえ、当人自身が、「空しい」とか「無意味だ」と感じていないとしても、である。これは、一種のラベリングであろう。ニヒリズムが、いわばニヒリズムという烙印を押すことから生み出されるのである。そこには多かれ少なかれ軽侮ないし揶揄の意味がこもっている。ラベリングである以上、これを「客観的」というのは適切でないかもしれないが、上記「主観的ニヒリズム」との対応上、「気分としての客観的ニヒリズム」と呼ぶことにする。

ちなみに「ニヒリズムに陥る」とは、どういうことか。この表現をそのまま受け取ると、ニヒリズムとはある状態であって、かつてニヒリズムにまだ陥っていなかった状態があった、ということになる。そして、これに連動して「ニヒリズムを克服する」ことが課題とされる。これは、ある種の精神疾患を連想させる。まるで、一定の治療法があるかのようである。

しかしながら、そもそもニヒリズムとは伝統的には、以上のようなある種の気分ないし心理的状

〈子ども〉論からみたニヒリズム

態などではなく、一つのイズムであり、一種の思想的立場とされてきた⁽³⁾。

ニヒリズムという言葉そのものは、ツルゲーネフが小説『父と子』(1862) のなかで既成の権威や秩序・価値を否定する人間の類型を指して用いて以来、一般に流布したといわれるが、ハイデッガーの推測によると、哲学史上での最初の使用は18世紀末のヤコービに遡るという⁽⁴⁾。すなわち、ヤコービがフィヒテの思想に対してニヒリズムだと批判的に論じ、これに対しフィヒテは自らの思想はニヒリズムではないと反論しているのである。いずれにしても、ここでは虚無を説く言説ないしそれが依拠する立場が問題となる。

ほとんどの場合、ニヒリズムは論難されるのが常である。ニヒリズムだとして論難される場合、当の立場の消極性・否定性・破壊性が指摘され、そこには未来への希望や展望がなく、人類や共同体に何らの利益をもたらさないというマイナスの評価が共通認識として介在する。批判する側はこのレッテルを相手に投げつけ、批判された側はこのレッテルには該当しないと抗弁することになる。この図式は、ヤコービとフィヒテのやりとり以来、変わることなく現代まで続いているといつても過言ではない。

とはいって、ニヒリズムという言葉に拘泥しなければ、さまざまな思想がニヒリズム的な要素をもっていることはありうる。たとえばプラトンの二世界説、すなわち感覚界を仮象の世界とし、これとは別個にイデア界があると考える思想、あるいは現世を仮の世界と見なし来世を信ずる宗教、たとえば仏教の浄土信仰などは、現実を否定的に見る以上、ニヒリズム的であると見なすことも不可能ではない。しかし、あくまでそれはそのような要素が含まれているというだけのことであって、おのれ自身がニヒリズムの立場であると主張しているわけではない。しかし、ニヒリズムを蔑視・排斥する立場からすれば、いささかでもそのような要素を含んだ立場を総じてニヒリズムだとして追及し、指弾することは可能である。

いずれにしても、ニヒリズムという語はネガティブに用いられる。つまり、ニヒリズムは「よくない」状態、「望ましくない」態度と見なされているのである。ニヒリズムを避けられるべきもの、脱せられるべきものとすることには変わりはない。ここでもまた、「ニヒリズムの克服」について語られることとなる。

かくして気分説にせよ、立場説にせよ、ニヒリズムという言葉はネガティブに、つまり批判の意味をこめて用いられることが通例であった。が、しかし、ここに決定的な例外が登場した。いうまでもなく、ニーチェである。

ニーチェはニヒリズムについて、みずからの立場をもそこへ含め、そしてさらにその運命について論じることになるが、ニヒリズムなる言葉をポジティブに使用した希有な例でもあった。もちろんニーチェといえどもニヒリズムを両義的に見ているが、ヨーロッパが必然的にニヒリズムの真只中にあり、しかもそれを引き受けるという意味で、ニヒリズムを肯定する立場を標榜したのも事実である。彼は「能動的な」ニヒリズム、「強さの徵候」としてのニヒリズムという言い方をする。

「なかば破壊的、なかば反語的な、精神の最高の力強さの、このうえなく豊饒な生の理想としての『ニヒリズム』」⁽⁵⁾。

土戸 敏彦

「ニヒリズムは一つの正常な状態である。それは強さの徵候でありうる」⁽⁶⁾。

ここには単なる気分としての主観的ニヒリズム・客観的ニヒリズムはむろんのこと、立場としてのニヒリズムをも超えた見方が含意されている。すなわち、ニヒリズムを必然と見なし、なんらかのかたちで肯定的に語るということは、立場としてのニヒリズムそのものを超えていくことを予想させるのである。

気分としてではなく、あるいは立場としてでもないかたちでニヒリズムを捉えるとは、どのようなことか。それは、人間の存在がそもそも、構造的に、本質的に、ないし体制として、ニヒリズムをなしているという洞察である。

言い換れば、気分としてどうあれ、立場がいかなるものであれ、人間という存在がニヒリズムという構造を体現しているというのである。したがって、ニヒリスティックな気分に陥っていようといまいと、ニヒリズムだと批判されようとされまいと、すでにニヒリズムそのものなのである。さらに、ニヒリズムには陥ってはならないと唱道し、あるいは他者に対してニヒリズムだと論難する態度自身、その存在構造においてニヒリズムから免れていないということになる。もしもニヒリズムがそういうものだとすれば、ニヒリズムの克服などということも原理的に意味をなさない。

哲学的にニヒリズムという場合、とりわけニーチェ以後、ニヒリズムはそのような、つまり構造としてのニヒリズムの意味合いをもつことになった。ニヒリズムを単純にネガティブなものとして位置づけるわけにはいかなくなったのである。

渡辺二郎は次のように言う。

「ニヒリズムの超克などは、或る意味では、あり得ぬことである。それは、超克されるべき現象であるのではなく、真っ直ぐに認められ、承認され、ひたすら受け容れられるべき、人間存在の、その存在構造を構成する一契機なのである。ニヒリズムという問題現象は、これを否認したり消去したり根絶したり絶滅したりできるような、つまりなくともよいような、たまたま人間存在の一様相として或る特定の場合にだけ浮かび上がってくるだけであるような、付隨的な現象では決してないのである」⁽⁷⁾。

しかし、それでは人間にあってすべてがニヒリズムであり、ニヒリズムでないあり方などありえない、ということになる。いったい、これはどういうことであろうか。

II ニヒリズムの源泉

ときとして、ひとは「何のために生きているのか」と口にする。これが恐るべき問い合わせだと気付かずに発するのである。

現代科学が明らかにしているところでは、われわれの宇宙はいわゆるビッグバンによって約120～150億年前に誕生した。その後宇宙は膨張し、今なお光速で膨張し続けているといわれる。しかしある時点で収縮に転じ、数百億年後には一点に縮爆するという。このビッグクラッシュが何を意味するか、言うまでもない。すべてがなくなるのである。宇宙さえ、である。とはいえ、おそらく

人類はそのはるか以前に滅亡しているだろう。いずれにせよ、どんなに工夫をこらしても、絶対に宇宙の消滅を越えては生き延びることができない⁽⁸⁾。

宇宙を尺度にとるのが大げさなら、人類生存のスパンで考えてもよい。人類は数百万年前に地球上に出現した。現生人類（ホモ・サピエンス）に限れば10数万年前である。人類のライフサイクルの上で、現在はいったいどの段階にあるのだろうか。残りの生存期間はどれくらいだろうか。要するに、人類はいつまで生き延びられるのか。最期はいつか到来する。その誘因になると想定される事がらには枚挙のいとまがない。核戦争・極度の環境汚染・隕石の地球上への落下・治療不能の疾患の蔓延……。数百年後に人類の最期は来るという科学的な予言すらあるという。

どんなに名声を誇ろうと、どんなに権力を手中にしようと、どんなに富を貯えようと、人類が滅亡すればそれらは無価値となる。どんなに平和な世界が実現されようと、どんなに幸福な社会が築かれようと、どんなに人間同士が愛と友情で包まれれようと、すべてそれらは無意味と化す。否、もはやそこでは「無価値」「無意味」という言葉さえ妥当しない。言葉なんか、ないのだ。

しかし、そんなことは目下われわれが生きていることとは無縁であり、われわれの生活感覚はそんなところにはないという意見もありえよう。実際、日常のなかでそのようなことを真剣に考える機会など絶てないし、われわれの意識にすらのぼらない。けれども別の見方をすれば、意識にのぼらないということは、事態を回避しているだけ、事実を忘れようとしているだけだという言い切らもできる。時間のスケールの問題はあるとしても、人類は永遠ではないという事実は明瞭である。このような観点に立って「生きる」ということを考えるなら、いかなる「生きる目的」を掲げようと、いかなる「存在することの意味」を挙げようと、それらは最終的に虚無へと回収されそうである。

問題をふりだしに戻してみよう。ひとは誰でも、自分の意志によってこの世に生まれてきたわけではない。気がつけば、この世に存在していたというのが実相である。同様に人類もまた、人類自身の意志によって地球上に出現したわけではない。現代の分子生物学が明らかにしたところによると、地球上の全生物のトリプレット・コドンすなわち遺伝暗号は同じであること、したがってここからは、全生物の源は一つであり、人間もまた進化の産物だということが帰結する。人間も生命の連鎖の一端でしかないものである。そのかぎりにおいて、人間だけを特別視するわけにはいかない。以下さしあたりは、人間をも含めて生命として論じる必要がある。

まず第一に確かだと見なしうることは、生命が発生したとき、発生した生命はその生命を保存することを宿命とするに至ったという事実であろう。なぜなら、保存を旨としない生命はただちに、あるいは少なくとも時間の経過とともに滅んだろうからである。つまり、結果的に保存を目指す生命のみが生き残っている。

仮にここに、生命の保存を至上命令とする生命の集団と、生命の保存に頓着しない生命の集団があるとする。いずれが生き残るかは自明である。たとえ、ある時期、偶発事によって生命保存に無関心な生命集団も、保存を目指す生命集団に遜色ないくらいに生存したとしても、何世代かを経ることによってそれぞれの生命に宿る性格は明白な結果をはじき出すはずである⁽⁹⁾。結局、生命と

はその生命的の保存を本質としている、と断言してもさしあたりは間違いない。（同語反復なのか論点先取、はたまた循環論法なのか）奇異な言い方だが、生命体は「生きる」ために生きている。

ところで、生命の保存とは何をいうのか。まず考えられるのは、それ自身の生命的の保存である。その場合は個体としての生命を指す。しかし、ただちにそれを拡張した意味が派生せざるをえない。なぜなら、個体の生命は永遠ではありえず、かならず終わりが来るからである⁽¹⁰⁾。すなわち、分裂してもいい、あるいは分身でもいい、さらには断片でもいい、ともかく自身の何かを保存できれば、それが生き残るということを意味しうる。この原理は、単細胞生物から哺乳類まで基本的に変わりはない。ドーキンスなら、その主体を遺伝子に見るだろう⁽¹¹⁾。

性と区別されるかぎりでの生殖⁽¹²⁾という行為は、以上のことと意味する。生殖とは生物の個体が自己と同じ種類の新しい個体を生ずる現象であるが、それを種の保存のためといつてしまえば、やや言い過ぎの感がある。結果的にはそういうことになるだろうが、さしあたりは生殖は、自身の複製を生み出すこと、したがって自身の保存が根底にある。

主体を遺伝子にとらずに個体にとるならば、生殖を通じて、個体は次の個体を生かすために生きているということになる。つまり、個体の生は、次に続く個体の生を目的としており、それ自身はある意味で手段と化している。しかし、そうして生まれた次の個体も、当然ながら同じく手段でしかない。かくて、一般に生命には、ある根源的な性向が潜んでいいると言える。すなわち、自己自身が手段となって、自己の再生産を目的とする、というものである。「自己の再生産」における「自己」は、一個の生命体としての自己自身でもありうるし、自己自身の複製ないし分身としての生命体でもありうる。

容易に見てとれるが、この構造全体は根本的なパラドックスを抱えている。要するに、目的が確定されないのである。事実として存在するのは手段ばかりだ。すべての個体は手段であり、目的はいったいどこにあるのか。さしあたり、手段の全体が目的だという言い方も成り立つ。しかし、それは一種のレトリックであって、手段の全体が目的だということは、〈目的〉など存在しないのだと言い換えることもできるのだ（過程そのものが目的だという弁証法風の哲学的な考え方もありえようが、論点がぼやけるのは否めない）。目的が次々と先送りされて無限の彼方に追いやられるということは、結局目的は存在しないということになろう。目的不在——これが何を意味するか。

だがその前に、そもそも「目的」とは何か。「目的」などというものはどこからやって来たのか（「手段」も、「目的」があるからこそ、「手段」だと位置づけられる）。

人間以外の生物を考えてみよう。これらの生物の各個体に「生きる目的」はあるか。これらの生物は「生きる目的」をもっているか（「種の保存が目的だ」という見解に対しては、「では、種は何のために保存されるのか？」と問うことができよう）。だれが「生きる目的」をもとうとするのか。だれが「生きる目的」などということを考えるのか。いうまでもない。人間である。すなわち、人間こそが、人間だけが、「目的」などという観念を（したがって「手段」という観念も）生み出した。人間こそが、「目的」の発明者なのである。

同じようにして、生存する〈意味〉も、あるいはまた、生きることの〈価値〉も人間が生み出し

〈子ども〉論からみたニヒリズム

たものであり、したがって人間を離れてそれらは存在しないという帰結が導かれる。とすれば、ニヒリズムはどのようにして生じてくるか、その問題を解くカギの所在がすでにここに暗示されることになる。

人間からみれば、人間以外の全生命の生き方は、ニヒリズムとしてしか映らない。なぜなら、それら生命は、目的も、意味も、価値もなく生きているからである。しかし、果たしてそうなのか。かれらは目的や価値をもっていないのではなく、最初から目的や価値とは無縁なのである。ということは、かれらの生き方をニヒリズムとして見る見方にこそ問題の根源がある。すなわち、視点が向けられたものの方にニヒリズムがあるのではない。ニヒリズムを生んだのは、ほかならぬ視点の方なのだ。ここには人間自身の一種の防衛機制としての投影が見られる。要するに視点の主体、すなわち人間こそがニヒリズムを背負って登場したことなのである。

人間は、目的・意味・価値等の観念なしには、ものごとを見ることさえできない存在である。生命という点で、他の生物と同次元に位置していた人間は、しかしこの視点のために他の生物とは異なる次元へと押し出される。人間は生存のために、目的や意味、価値を必要とする。それが存在しないことは、人間にとて重大な危機となりうる。

再度繰り返してみると、生命体は、生命保存をその本質とする。しかしながら、人間なる生命体は、生命保存を本質としているかどうか、すでに疑わしい段階に達した。あるいは、次第にその正体が露になったというべきか。以下の現象を、人類の一部もしくは多くの部分がこれまで禁止し、阻止し、反対してきたという事実は、当否は別としてみずから生命保存を重視してきたことの表われであろう。すなわち、自殺・避妊・墮胎・幼児虐待・殺人・殺戮・戦争・核兵器……⁽¹³⁾。言い換えれば、意識的に生命の保存を意図しなければ、人間にあっては生命が保たれなくなる恐れが出てきたのである。かくて、生命保存を、規範として、あるいは文化として定立すべきことを人間は強いられるに至った。人間は、「生きる」ことを〈価値〉として掲げなければ、生きることすらままならなくなっているのである。

何かを信じるということが、すでにニヒリズムと裏表になっている。信じるものを持ったときのことを考えてみれば、容易に理解できよう。永遠の信頼があればニヒリズムに陥らないという反論がありそうだが、この種の素朴な二項対立的発想が通用する時代はもはや過去のものとなった。われわれが直視すべきは、信頼という行為そのものがニヒリズムを潜在的に産出しているという冷厳な構造である。

この信頼は、宗教的な信仰だけを指すのではない。さまざまな価値はもちろんのこと、この世のありとあらゆる事象がそのような信頼の対象となりうる。すなわち、何らかの価値（観）を有するいかなる思想・文化・科学といえども、ニヒリズムと表裏をなしている。生まれながらにして、ニヒリズムと双生児なのである。その理由は、それらが「価値」を保持・提示し、「価値」に支えられているところにある。

すでに見たように、これらの価値を相対化する立場、あるいはこれらの価値の根拠を否認する立場が、一般に「ニヒリズム」と呼ばれる。しかし両者、すなわち価値を保持する立場と相対化する

立場とは、近接しているどころか、実は同根である。

ニーチェにおいて「ニヒリズム」の用語が、変幻自在に姿を変えるよう見えて捉えにくい印象があるのもそのせいである。

キリスト教が、あるいは道徳一般がなぜニヒリズムなのか。そのような信じうるものももたない者、行為が依拠しうる規範を失っている者こそ、ニヒリストではないのか。通常、そのように異議が唱えられる。

ある道徳を信じていた者が、あるときその道徳を支えるものを見失う、そのとき彼はニヒリズムに襲われるだろう。しかし、ニーチェはそれ以上のことと言っている。ニヒリズムとは「道徳を信ずることの結果ですらある」⁽¹⁴⁾ と。

これは、第1節に見た、ある立場を批判してニヒリズムだと言うのに一見似ている。しかし、ニーチェの場合はそうではない。というのも、ニーチェ自身もニヒリズムから逃れられないことを自覚しているからである。ニーチェの場合は、「ニヒリズム」は単なる批判や論難の言葉ではない。ニヒリズムの必然性がそこでは語られている。

価値を掲げるもの眼には、価値や目的と無縁に生きている者が、いわばニヒリストに映るかもしれない。この図式は、次に述べる〈大人〉と〈子ども〉の関係におのずから通ずることとなる。

III ニヒリズムの不可避性とその「克服」の意味

〈子ども〉とは、あらゆる人間のなかに内在している独特の性向である。それは、人間的好奇心の源泉をなし、未知への探索衝動そのものであり、打算や利害と無縁、かつ善惡未分化の世界に棲息する⁽¹⁵⁾。実際には大人とされる人間のなかにも、このような〈子ども〉は内在していて、ときとして機会をとらえて出現てくる。たとえば、熱狂、陶酔、没頭、狂喜等の瞬間もしくは状態において、それは目撃されうる。

この意味での〈子ども〉は、生きる目的をもたない。生きる目的について詮索しない。生きることの意味について無頓着である。生きることの意味を何かに見出そうとしない。ただ、ひたすら生きている、それだけである。

もしもニヒリズムをすでに見たような、立場のニヒリズム、それも論難される場合のそれとして考えるなら、生きる目的や価値・意味をもたない生き方、もしくはそれと無縁に生きているあり方は、一種のニヒリズムとは見えないだろうか。人間以外の動物は、生きる目的をもって生きているとわれわれは見なさない。しかし、この動物たちをニヒリストと呼ばないのは、かれらが人間ではないからである。ニヒリズムうんぬんは人間にとてのみ妥当する。

では、〈子ども〉についてはどうなのか。ここには、おそらく歴史的な子ども観の変遷がからんでいて、事情はかなり複雑になっていると考えられる。

たとえば、アリストテレスは“子ども”を牛馬と等し並みに見ていた⁽¹⁶⁾。そのかぎりで、分別のなさの源泉であると目される〈子ども〉はニヒリストではありえなかった。人間の範疇に算入さ

れていなかっただろうからである。かつてはそのような視点がありえた。

しかし、いわゆる近代以降“子ども”を見る視点の枠組みは大幅に変容する。かつての見方、すなわち牛馬のような存在か、さもなければ不完全な大人かという振り分けを蒙った子どもは、いまや“子ども”としての存在価値を認められるに至る。ただし、ここで言う〈子ども〉としてではない。近代固有の願望をこめられて、規範化された「子ども」として〈大人〉社会に受け入れられたのである。ちなみにこの場合の〈大人〉とは、いかなる人間にも内在するところの、共同体維持にかかる人間の基本的性向である。

“子ども”は一方で美化され、神聖化され、愛情のまなざしが降り注がれ、同時に他方でしつけられ、訓練され、教育される対象となった。つまりは、“子ども”は、〈大人〉の願望かつ共同体における規範として、すなわち「子ども」として時代のほとんど主役となって登場することになったのである。

このことが他面で意味したのは、「子ども」の出現によって〈子ども〉が隠されたということである⁽¹⁷⁾。すなわち、〈大人〉にとってニヒリズムを体現しただろう〈子ども〉は登場しないまま、舞台から消え、姿を隠した。

“子ども”がニヒリズムを象徴するなどということはありえないという〈大人〉の信念は、この経緯によっていっそう強化された。それどころか、〈大人〉にとって「子ども」は、ニヒリズムの対極に位置するもの、希望の象徴、人類の未来、夢、幸福、等々である。かくて、「子ども」はニヒリズムとまったく相入れないこととなり、ニヒリズムは“子ども”一般とは別世界の物語だとの通念が広く社会を支配するに至った。しかし、〈大人〉の目にその姿を現わすことなく、潜在化したままの〈子ども〉についてはどうなったのか。

近年、子ども・若者などいわゆる若年層について、さまざまの特異な現象が顕在化してきていることが指摘される。社会規範が存在しないかのような振る舞い、善惡の基準を知らないかのような行動、残虐非道とされる事件を起こしながら罪悪感がまったくないという心境、あるいは生命を生命と見なさないような挙動……。

個々の事象および事件についてはそれぞれの背景があり、いたずらに概括化・一般化してはならないことを踏まえたうえで、なおかつコメントしうることは、このような諸現象に〈子ども〉性が多少ともからんでいるのではないかという点である。

そして、もしも〈大人〉がこのような諸現象にニヒリズムを見てとっているとするならば、やはり〈大人〉が〈子ども〉の性格そのものをニヒリズム的と見ている可能性がある。〈大人〉は〈子ども〉についてさまざまな現象を通していわば間接的に察知しているだけであり、〈子ども〉そのものとして認識しているわけではないが、〈大人〉から見れば、〈子ども〉はニヒリズムを生きているように見えたとしても不思議はない。

さてそのような認識に立ったうえで、以下のことを注記しておかねばならない。一般に〈大人〉は子どものなかにニヒリズムを見ることはない。正確には、子どもの中にニヒリズムを見ることを欲しないのだ。これはいわゆる近代以降に顕著な傾向であるが、〈大人〉は、るべき姿、すなわ

ち規範としての「子ども」以外の“子ども”を真正面から見ようとしなくなったからである。

ここには甚だしく入り組んだ事情がある。ニヒリズムは実は（以下に述べるように）〈大人〉が持ち込んだものなのだが、〈大人〉はそのことを認めない。むしろ、価値や目的をもたない者がニヒリズムを生きていると見る。だとすれば、〈子ども〉がそれに該当することになりそうだが、ところが〈大人〉はそのような〈子ども〉を直視することなく、規範としての「子ども」にすりかえたりえで“子ども”を（つまり規範としての「子ども」と現実の子どもとの関係を）論じるのである。「子ども」はニヒリズムと正反対の極に置かれ、美化される。

かくして〈大人〉は、自分たちが設定した目的や価値を懐疑的に見たり、承認しない者たちを、ニヒリズムに陥った者と見なすに至る。こうした〈大人〉によって喧伝されたニヒリズムが、現代の若者たち、さらには子どもたちのあいだに蔓延していると、〈大人〉は慨嘆するのである。こうした複雑な過程が、冒頭に挙げた「気分としてのニヒリズム」を生んでいると見ることもできる。

〈子ども〉はたしかに、生きる目的や意味に対し一顧だに与えない。ならば、こうした〈子ども〉はニヒリストであろうか。ニヒリズムとは、そういうことなのだろうか。

むしろ、ニヒリズムはどこから来るかと言えば、然り、目的や意味、価値を意識する、まさにその地点、その瞬間である。すなわち、ニヒリズムの源泉は〈大人〉にある。なぜなら、〈大人〉こそが、価値や意味を求め、見出そうとするからである。

まさに〈価値〉や〈意味〉を持ち込むことから、ニヒリズムは始まるのである。ところが常識はそうは考えない。すなわち、〈価値〉を掲げる視点からするならば、〈価値〉を掲げない視点、したがって〈意味〉を求めない視点こそがニヒリズムだとされる。両者は一見、相入れない対極のように見える。しかし、そのように〈価値〉を掲げる視点そのものが実は、ニヒリズムへの臨界線に立っているのである。

意味がなければ、無意味もない。無意味さは、意味が本来あるべきところに当の意味が欠けているという事態から生ずる。ニヒリズムとは意味の不在であるが、だとすればニヒリズムの根元は意味そのものにある。そして、意味と無縁な場所にもともとニヒリズムがあるわけがなく、したがって意味を追い求める者すなわち〈大人〉こそがニヒリズムを湧出させるのである。

だとすれば〈大人〉であるかぎり、誰でもニヒリズムを内部に抱えている。純粹〈子ども〉でないかぎり、すなわち、（子どもも含めて）いかなる人間といえども〈大人〉性を有するかぎり、誰もそこから逃れることはできない。このことは不可避であり、人間の宿命なのだ。

ただ次のような反問もありえよう。〈子ども〉はニヒリズムを免れている、あるいは無縁であることを認めたとしよう。しかし、それでは、〈子ども〉の「なぜ？」をどう理解するのか。「なんのために人間は生きてるの？」という問いは、〈意味〉を求めてはいないのか。「なんのために」とは、まさに〈目的〉を示唆してはいないのか。

この問い合わせに対する回答は以下の通りである。この〈子ども〉の問いは、「なんのために生きるのか？」という〈大人〉の問いとは異なるのではないか。〈子ども〉の「なぜ？」と〈大人〉の「なぜ？」は異なっている。後者は、ニヒリズムを漂わせる。なぜなら、意味の無意味化にたえずつき

まとわれているからだ。

これに対して、〈子ども〉の問いは文字どおり“無心”である。好奇の心から発するゆえ、目指す意図がない。したがってそれは、意味を問うているわけではない。つまり、意味を求めているわけではない。答えを与えられて納得する類いの問い合わせではないのである。ひたすら未知の領域に足を踏み入れること、つまり既成の枠の外に脱出することだけがその動機である。

つまり、問い合わせにも二種類存在する。答えを求める問い合わせ（答えが与えられてはじめて完結する問い合わせ）と、問うこと自体で成り立つ問い合わせ（答えがそもそも存在しない問い合わせ）である。前者が〈大人〉の問い合わせ、後者が〈子ども〉の問い合わせにほかならない。

〈子ども〉は解ではなく、問い合わせを求める。その意味で、〈哲学〉という営みをあらためて再考する必要があるかもしれない。〈大人〉の哲学と〈子ども〉の哲学とは、根本において異質なのかもしれない。後者には、根本において異質なところがある。

〈大人〉の眼に、〈子ども〉の「意味のない問い合わせ」「答えのない問い合わせ」がニヒリズムに映っても無理はない。人間が自身をどのように位置づけようとも、生きることの意味や価値が普遍的にそれ自身として存在しているという固定観念に人間はとらわれ続けてきた。あるいは、そのように信じ込まざるをえない形而上学的宿命が人間にはあるのかもしれない。そしてその人間とは、ほかならぬ〈大人〉である。〈大人〉はこうしてニヒリズムを自身以外のところ、“無”が跳梁している場所に見出して、みずからを納得させてきた。ところが今や、〈子ども〉の問い合わせという鏡にわが身を映すことによって、自身の中核にニヒリズムの影が宿っていることを見出して、〈大人〉は戦くのである。

ちなみに〈大人〉が戦くものの典型として「死」が挙げられるが、この戦きはゆえなきことではない。「死」は、いまでもなくニヒリズムとつながっているからである。ニヒリズムのモチーフは実のところ、「死」から由来したものかもしれないのだ。例外なく〈大人〉は古来から、それを恐れ、遠ざけ、非日常的なものとして、目に触れぬよう伏せてきた。厳かなセレモニーによって、畏敬をもって異界へと退けてきた。

このような「死」は〈子ども〉にとっては何であろうか。死について〈子ども〉は興味を抱く。しかし、それは、死が未知であり、好奇の対象であり、不思議の象徴であるからであって、決して生と対極をなす何かとしてではない。みずから死を求めるのは、むしろ〈大人〉である。したがって自殺するのは〈大人〉だけである。〈子ども〉は自殺しない。〈子ども〉は危険なほどに（つまり生命が危うくなるほどに）快楽としての生に向かっている。

「万有の真相は唯一言にして悉す、曰く『不可解』」なる言を残して身を投げた藤村操は、その意味で〈大人〉であった。彼は、解を求めていた。だからこそ「不可解」という言葉が結果するのである。

さて、以上のようなニヒリズムについて、おそらくニーチェは知り尽くしていた。しかしそのニーチェがまるで「ニヒリズムの克服」を思わせるような語り口をする。

「私の生きぬくがごときそうした実験哲学は、最も原則的なニヒリズムの可能性をすら試験的に

先取する。こう言ったからとて、この哲学は、否定に、否に、否への意志に停滞するというのではない。この哲学はむしろ逆のことにまで徹底しようと欲する——あるがままの世界に対して、差し引いたり、除外したり、選択したりすることなしに、ディオニュソス的に然りと断言することにまで——、それは永遠の円環運動を欲する。……哲学者の達しうる最高の状態、すなわち、生存へとディオニュソス的に立ち向かうということ——、このことにあたえた私の定式が運命愛である」⁽¹⁸⁾。

ニヒリズムの徹底がすなわちニヒリズムの「克服」だというのはたやすい⁽¹⁹⁾。しかし、ニヒリズムは人間の存在構造である以上、出口はありえなかつたはずである。いったい「ディオニュソス的な肯定」とか「運命愛」という言葉で、彼は何を言おうとしたのか。

たしかに、ニーチェは「無邪氣」という〈価値〉と〈価値〉なき「無邪氣さ」とのあいだで揺れ動いているように見える。「無邪氣」を一つの〈価値〉にしてしまえば、またぞろ〈無価値〉の影に脅かされ、ニヒリズムが徘徊するだろう。しかし、一切の〈価値〉をご破算にする「無邪氣」が支配するところではニヒリズムは生い立ちようがない。どちらに傾くかによって、結果はまったく違ってくる。

『ツアラトゥストラ』の冒頭で、ニーチェは精神の三変化について述べている。精神はまずラクダになり、次いで獅子となり、最後に子どもになるという。

「子どもは無邪氣そのものであり、忘却である。一つの新しい始まり、一つの遊戯、一つの自力でころがる車輪、一つの第一運動、一つの神聖な肯定である」⁽²⁰⁾。

奇しくも、ここに“子ども”が現われる。精神の到達点が、“子ども”とされているのである。この“子ども”が、仮に本稿で主題化しようとしている〈子ども〉だとすれば、どうか。どのような解釈が可能なのか。

〈大人〉にはニヒリズムに見える〈子ども〉が、実はニヒリズムとは無縁であった。それどころか、当の〈大人〉がニヒリズムと背中合せに生きている。〈大人〉は原理的にニヒリズムからは逃れられない。〈大人〉はそのことを、いつの日か身をもって知らねばならない。それはあまりに酷なことではある。しかし、みずからニヒリズムを生きねばならないことが自覚にもたらされた以上、残された方法は今やそれとの「共生」しかないのではないか。しかし、そもそも「ニヒリズムとの共生」などということが可能なのか？ そこで重要な示唆をするのが、〈子ども〉の生きかたである。

一種の「ニヒリズムの克服」のようにさえ見える「ディオニュソス的な肯定」とは、実は〈子ども〉への移行あるいは〈子ども〉への合体を意味しているのではないか。ニヒリズムを抱えた存在が、それを抱えたままニヒリズムから自由な存在として生きる——そのような境地がそこではイメージされている。しかし、むろんそれは事実としては困難である。困難ではあるが、価値や意味に拘泥しない〈子ども〉として生きることが、ニヒリズムから解き放たれた生き方を暗示している。

そのような生き方は夢であろう。それはたしかに夢であり、見果てぬ夢である。しかし、人間が苦惱・煩惱に満ちたこの世界を生き抜くために、それは究極の憧憬といえるかもしれない。

註

- (1) 竹内整一・古東哲明編『ニヒリズムからの出発』ナカニシヤ出版, 2001, 6-8頁。
- (2) Bert Lambeir & Paul Smeyers, Nihilism: Beyond Optimism and Pessimism, *Studies in Philosophy and Education*, Kluwer Academic Publishers, Vol.22, 2003. pp.183-34. ニーチェのいう「心理的状態としてのニヒリズム」がこの種の気分を包括するものかどうかは、定かではない。
- (3) 『広辞苑』第5版(CD-ROM 1998)によると、「ニヒリズム」とは「①ツルゲーネフが小説「父と子」のなかで既成の秩序・価値を否定する主人公をニヒリストと呼んで以来, 当時のロシアの革命的民主主義者がこの名で呼ばれるようになり(日本では虚無党と訳した), 後に一般化した。②真理や道徳的価値の客観的根拠を認めない立場。虚無主義ともいう。古くは老莊の哲学, 仏教の空觀, 近代ではニーチェ, 20世紀ではシェストフなど。③伝統的な既成の秩序や価値を否定し, 生存は無意味とする態度。これには無意味な生存に安住する逃避的な傾向と, 既成の文化や制度を破壊しようとする反抗的な傾向とがある。」とされ, ここでいうような「気分としてのニヒリズム」は挙げられていない。
- (4) Martin Heidegger, *Nietzsche II*, Pfullingen: Neske, 3.Aufl. 1961. S.31. マルティン・ハイデッガー『ニーチェ』II(細谷貞雄監訳)平凡社, 1997, 265頁。
- (5) Friedrich Nietzsche, *Der Wille zur Macht*, Stuttgart: Kröner, 1964. S.17. フリードリッヒ・ニーチェ『権力への意志』上(原佑訳)ちくま学芸文庫, 1993, 32頁。
- (6) Ibid. S.20. 同上書, 38頁。
- (7) 渡辺二郎『ニヒリズム——内面性の現象学』東京大学出版会, 1975, 103頁。
- (8) 渋谷治美『逆説のニヒリズム』花伝社, 1994, 14-19頁。渋谷治美「現代自然科学と〈宇宙論的ニヒリズム〉」, 『ニヒリズムからの出発』36頁, 参照。
- (9) 後で述べるように, ヒトはこれに当てはまらない。人間は, 生命保存を「規範」ないし「文化」として設定するに至った。というより, そのように設定せざるをえなかった。
- (10) 遺伝子に死のプログラムが組み込まれているという意味でも, 個体は死を免れない。田沼靖一『死の起源——遺伝子からの問いかけ』朝日新聞社, 2001, 15頁。
- (11) Richard Dawkins, *The Selfish Gene*, Oxford University Press, 1989. リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』(日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳)紀伊国屋書店, 1991。
- (12) リン・マーグリス, ドリオン・セーガン『性の起源——遺伝子と共生ゲームの30億年』(長野敬・原しげ子・長野久美子訳)青土社, 1995, 25, 34頁。
- (13) これらについては人間に固有の現象として客観的に挙げている。それゆえここでは, それらに対して善悪等の価値判断をくだす意図はまったくない。
- (14) Nietzsche, Op.cit. S.10. ニーチェ, 前掲訳書(上), 23頁。
- (15) 〈子ども〉については以下の論考を参照。拙著『冒険する教育哲学——〈子ども〉と〈大人〉

のあいだ』勁草書房, 1999。括弧の表記の違いに、すなわち〈子ども〉と「子ども」の違いに注意されたい。

- (16) Aristotle XIX, Nicomachean Ethics, Loeb Classical Library, Cambridge/London 1926. pp.436-37. アリストテレス『ニコマコス倫理学（下）』岩波文庫, 56頁, 参照。なお、ここで“子ども”と表記しているのはいわばニュートラルな表現であって、筆者のいう、現実の子ども、規範としての「子ども」、性向としての〈子ども〉のいずれであるか特定されえない場合、あるいはそれらのいずれでもなく漠然と指す場合に用いている。
- (17) 拙稿「〈遊〉なるがゆえの〈子ども〉の教育不可能性」『九州大学大学院教育学研究紀要』第5号, 2003, 参照。
- (18) Nietzsche, Op.cit. S.679f. ニーチェ, 前掲訳書（下）, 518頁。
- (19) 竹田青嗣『ニーチェ入門』ちくま新書, 1994, 158頁。
- (20) F. Nietzsche, *Also sprach Zarathustra*, Stuttgart: Kröner, 1969. S.25. ニーチェ『ツアラトウストラ』上（吉沢伝三郎訳）ちくま学芸文庫, 1993, 50頁。

**Der Nihilismus aus der Sicht von der “Kind”-Lehre
— Nihilismus als ein Struktur und seine “Überwindung” ? —**

Toshihiko TSUCHIDO

1. Es gibt einige Arten in der Bedeutung vom Nihilismus: der als Stimmung, der als Standpunkt usw. Auf jeden Fall hat man den Nihilismus nur negativ betrachtet. Aber welche auch immer die Stimmungen und die Standpunkte sein mögen, kann man fragen: hat das Menschentum eigentlich nicht den Struktur des Nihilismus ?

2. Als das Leben auf der Erde entstand, mußte es notwendigerweise Erhaltung seiner selbst zum Schicksal machen. Hier kann man einen Mechanismus sehen, in dem das Leben seine eigene Reproduktion zum Zweck macht, indem es sich selbst zum Mittel macht. Das ist ein radikales Paradox, weil in diesem Fall alles und jedes ein gewisses Mittel ist und es nirgendwo Zweck gibt.

Ohne Begiffe von Zweck, Sinn, Wert usf. kann aber der Mensch nichts sehen und denken, von hier ab tritt der Nihilismus auf.

3. Das “Kind”, das als eigentümliche Neigung in jedem Menschen liegt, ist Quelle der Neugier und wohnt in der Welt, in der sich das Gut und das Böse noch nicht teilen. Dem “Erwachsenen” könnte das “Kind” erscheinen wie es den Nihilismus lebte.

Aber der Ursprung des Nihilismus ist ja umgekehrt im “Erwachsenen”. Denn der Augenblick, wo der “Erwachsene” gerade dabei sind, Sinn und Wert zu suchen und zu finden, ist nichts anderes als der Punkt der Entstehung des Nihilismus.

Insofern muß der Mensch mit dem Nihilismus nur “zusammenleben”, dabei könnte es ihm wertvolle Anregungen holen, daß das “Kind” ohne jede Beziehung zum Nihilismus lebt.